

ポローニア

paullownia

vol. 40



絵：「生命」池田帆波（附属聴覚特別支援学校 高等部専攻科造形芸術科2年）

目次

- 2 教育長 挨拶
巻頭言「チーム筑波附属へ」
◆宮本信也
創立70周年を迎えた附属駒場中・高等学校 ◆大野 新
- 3 第3回 黒姫高原共同生活の報告
◆黒姫高原共同生活実行委員会
平成29年度オープンキャンパス開催
◆濱田 淳
筑波大学夏季省エネ・節電標語表彰式
◆附属学校広報戦略推進委員会
- 4 鈴木オリパラ担当大臣が本校を訪問
されました! ◆根本文雄
国際クーベルタンユースフォーラムに
参加して ◆藤原亮治
- 5 世界パラ陸上競技ジュニア選手権
銅メダル!! ◆小山信博/吉川琴美
大相撲横須賀場所春巡業「ちびっ子
わんぱく相撲」に参加しました
◆工藤久美
- 6 ハワイ児童交流会を終えて
◆鷺見辰美
第1回 インドネシア日本高校生SDGs
ミーティング@ジャカルタを開催
◆建元喜寿
- 7 富浦生活 ◆多田義男
プリンスエドワード島大学 (UPEI)
研修 ◆矢田理世/曾根典夫
- 8 附属学校教育局主催「教員研修会」
附属学校研究発表会



チーム筑波附属へ

附属学校教育局長、理事・副学長 宮本信也



SHINYA
MIYAMOTO

筑波大学附属学校群は11校で構成されています。各学校は、それぞれの歴史と特徴を有し、初等中等教育に関する日本における先導的拠点としての活動を行ってきています。

一方、附属学校群では、学校の特色を活かした個々の教育実践と研究の継続とともに、附属学校間で連携した教育活動も行われるようになってきています。その中心は、普通附属学校と特別支援附属学校間の児童生徒の交流です。さまざまな特性・特徴のある子どもたちが、一緒に活動することで、お互いの違いや多様性を理解していくことには、とても意義深いものがあると思っています。

こうした交流教育は2校間で行われているのが通常ですが、私たちは2年前から次のステップに踏み出しました。黒姫高原共同生活と共生シンポジウムです。どちらも、10校前後の児童生徒が参加する活動です。これらの活動では、障害のある子どもが自分とは違う障害への理解に近づいたり、参加した子どもたちの中に障害の有無にかかわらずみんな同じ高校生だ、中学生だという意識が芽生えたりする様子が印象的でした。

国立大学の附属学校の将来像が問われていますが、私たちのこれらの教育実践にその回答の一つが含まれているように感じています。附属学校群11校は、1校で十分な力を持っていると思いますが、各校が揃って活動することでより新しい教育実践を行い、開発していけるのではないのでしょうか。

創立70周年を迎えた 附属駒場中・高等学校

今年は、附属駒場中・高等学校にとって創立70周年にあたります。昭和22(1947)年、東京農業教育専門学校附属中学校として開校以来、70年の歳月を積み重ねることができました。今年はさまざまなイベントが開かれています。

5月2日(火)午後より、まず本校体育館において、記念式典を行い、その後記念講演会を開催しました。式典には宮本教育長をはじめ、同窓会長、後援会長、PTA会長にもご列席いただき、生徒、保護者とともに70周年を祝いました。講演会は「君たちはどう生きるべきか～21世紀を生きる生徒諸君に～」とのテーマで、卒業生の尾見茂氏(17期生)、富山和彦氏(27期生)、安田洋祐氏(46期生)よりご講演いただきました。進行は坪倉善彦氏(32期生)にお願いしました。みなさま各界でご活躍の方々に、現役生徒諸君にとっては大変有意義なひとときとなりました。

夕方からは、セルリアンタワー東急ホテル・ボールルームにて、祝賀会を開催いたしました。大学・附属学校関係者、地域の学校関係者、卒業生、保

附属駒場高等学校 副校長 大野 新

護者、現役・退職教職員など484名の方々にお集まりいただきました。大変盛大な会となり、70年の歴史の重みを感じることができました。なお、記念品の製作には「工房わかざり」の多大なご協力を得ましたことを合わせてお伝えいたします。

そのほかの70周年事業として、記念グッズ(タオル、校歌CD、トートバッグ)の製作のほか、今後、記念誌の発行と70周年記念会館の建設を進めてまいります。約20年前に建設した50周年記念会館の拡充をはかるもので、現在も寄付を呼びかけています。今後とも周年事業へのご理解ご協力をよろしくお願いいたします。



記念式典(宮本教育長ご挨拶)



卒業生から現役生にむけての講演会



記念祝賀会の一コマ

第3回 黒姫高原共同生活の報告

黒姫高原共同生活実行委員会

7月26～28日に第3回黒姫高原共同生活が実施され、附属学校10校（視覚・聴覚・大塚・桐が丘の特別支援学校、小・中・高・駒場中高・坂戸高）から、9～18歳の児童生徒80名が参加しました。主な行程は以下の通りです。

《1日目》バス内交流（アイスブレイク）→ 開校式 → 野外炊飯（カレー＆ピザ）→ 館内交流（レク・クイズ・ゲーム）

《2日目》朝の体操（ドラえもん版）→ 自然散策「森のアドベンチャー」→ アイスクリーム＆思い出の作品づくり → キャンドルファイヤー・花火

《3日目》朝の体操（関西弁版）→ ナウマンゾウ博物館見学 → バス内交流（感想・レク・ゲーム）→ 閉校式

附属学校群の児童生徒たちは5月に実行委員会を立ち上げ、バスや館内の交流、朝の体操、キャンドルファイヤーの企画を練り上げるとともに、誰もが活用できる“しおり”の作成に励みました。夏休みが終わった今も、学園祭等の活動を活用して交流を続けています。



ホテル前の芝生広場でカレー＆ピザに挑戦し、味に満足



水温は？、味は？、流れの音は？ 五感で体験

平成29年度オープンキャンパス開催

理療科教員養成施設 講師 濱田 淳

7月30日(日)、筑波大学東京キャンパス文京校舎121講義室で行われました。

天候が心配される中、26名の参加者がありました。このイベントは視覚特別支援学校の理療科教員を志望する人たちへの情報発信で、支援学校の他、大学、視覚障害者支援施設からの参加があります。関東近郊だけでなく、中部、関西から来られた方がいらっしゃいました。また、はり・きゅう・あん摩マッサージ指圧の3免許を持っている専修学校出身者も入学できるため、都内、大阪、京都、仙台の専門学校出身の方々がいらっしゃいました。施設長挨拶に始

まり、施設概要・沿革、カリキュラム・卒後進路、入試の説明、体験授業、治療施設見学と進み、残りの時間は現役施設学生や専任教員が、個別の疑問や相談に応じました。約2時間、終始和やかなムードで行われました。



筑波大学夏季省エネ・節電標語表彰式

筑波大学附属学校
広報戦略推進委員会

筑波大学では夏季省エネ・節電行動計画の一環として、附属学校の小学生を対象に標語を募集し、応募219作品の中から優秀作品を選考し、9月6日に東京キャンパス文京校舎で表彰式を実施しました。

【最優秀賞：2作品】『その1℃ 地球のため 未来のため』（坂井祐基：附属小学校5年）／『みんなで節電 みんなの未来を みんなが救う』（原 彩乃：附属聴覚特別支援学校小学部5年）

【優秀賞：5作品】『ふうりん うちわ かきごおり 電気をつかわず 夏のりきる!』（土山夏菜：附属小学校2年）／『『もったいない』 みんなで思えば 力となる』（久村実央：附属小学校3年）／『おひさまは ちゃんと見てるよ むだづかい』（富田

麻椰：附属小学校4年）／『そこまでは 車をやめて あるきます』（吉田喜咲：附属桐が丘特別支援学校小学部2年）／『植物から すずしさの パワーをもらおう』（水澤奈音：附属視覚特別支援学校小学部6年）



記念撮影 石野利和副学長（環境 エネルギー対策委員会委員長）、宮本信也副学長（附属学校教育局 教員長）と受賞者の児童

鈴木オリパラ担当大臣が本校を訪問されました!

附属大塚特別支援学校 副校長 根本文雄



8月24日(木) 鈴木俊一東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当大臣が附属大塚特別支援学校を視察されました。今回の訪問は、附属大塚特別支援学校と附属坂戸高等学校との交流及び共同学習の視察を目的としたものです。柘植雅義校長や副校長から本校の概要、本校のセンター的役割及び「ミライの体育館」に関する取組等について説明を受けた後、体育館に移動し、インクルーシブ教育システム構築モデル事業(心のバリアフリー)の授業「おにボール」の実践を見学していただきました。このおにボールとはキンボール(直径122cmでナイロンのカバーをつけた大きなゴム風船のようなボール)という道具を使ったチーム戦の『おにごっこ』のことで、坂戸高等学校との交流を通して生まれ

た、本校高等部が考案したアダプテッドスポーツです。熱気あふれる体育館で、互いに声をかけ合い、さりげなく助け合い、喜び合う場面を見ていただきました。その姿に鈴木大臣からも「こうした活動を通して、まさに心のバリアフリーを実現させていきたいですね。」と、感想をいただきました。授業の視察後、生徒代表から作業学習で作成した「タオル製品」の贈呈がありました。続いて、知的障害の一人ひとり子どもの学びに合わせて作成した手作り教材も実際に体験する等、視察していただきました。



国際クーベルタンニュースフォーラムに参加して

地元観光広場における各国パフォーマンスの様子

附属坂戸高等学校 主幹教諭 藤原亮治

国内選考を突破した坂戸・附属・駒場高4名を含めた7名を引率し、8月中旬にエストニアで開催された上記フォーラムに参加しました。このフォーラムは、近代オリンピックの創立者クーベルタンの理念を継承する学校・組織から派遣された高校生が7日間のプログラムを通じて、オリンピックやパラリンピックの掲げる価値を体感していくものです。同年代の国際交流・異文化交流としても非常に濃密で有意義な経験となりました。

地元地域の全面的協力のもと、芸術WSやスポーツ体験、ディスカッションなど毎日遅くまで、びっしりとアクティビティが用意されていました。否が応でも生徒が混ざり合うこうした環境は、全ての国の参加生徒の価値観や人生観を揺さぶるものになったはずです。最終日、ホテルのロビーで泣きじゃくる参加者の姿が非常に印象的でした。

2020年に東京開催を控える日本への興味関心は高く、生徒もそうした状況をしっかりと認識し、準備を進

め、「創作演武」や「折り紙ワークショップ」など、多くの参加者や地元の方を引き付ける内容を盛り込み、フォーラムを盛り上げました。運動課題・筆記試験などは、それぞれの個性を生かし、随所で高いパフォーマンスを発揮し、プログラムの「優良」成績者に送られる「クーベルタン・アワード」を全員が受賞し修了することができました。

今回のフォーラムについて「ここを出発点とできる学びをこれから自分らしく進めていく」想いをコメントに寄せてくれ、いつの日か広い世界で豊かに躍動する彼らの姿を想像してやみません。



スポーツ課題「走り幅跳び」の様子



大盛況の折り紙ワークショップ(ミニエキスポの様子)

世界パラ陸上競技 ジュニア選手権銅メダル!!

附属桐が丘特別支援学校 教諭 小山信博
高等部3年 吉川琴美

吉川琴美さんは、中学部3年のとき、学校行事で出場した東京都の障害者スポーツ大会で優勝して以来、陸上に取り組みはじめ、半身まひを有するT37クラスで、100m、200m、400mの日本記録を半年で樹立しました。学業と両立しながら国内外の競技会に出場し、パラリンピックを目指す若きアスリートです。



陸上を始めて今年で3年。高等部3年になった今年も、第28回日本パラ陸上競技選手権大会(6月10日~11日)で自身のもつ400m日本記録を更新するなど、各種大会に出場して活躍しています。

8月3日~6日にかけては、スイスのノットビルにて開催された、世界パラ陸上競技ジュニア選手権2017に出場しました。100mでは7位、200mでは3位に入賞し、銅メダルを獲得しました。100mでは、目標タイムに惜しくも届かなかったものの、200mでは目標であったメダル獲得を達成することができました。大きな舞台でも、楽しんで走ることができたようです。

今後は、2020年の東京パラリンピック出場を目指し、まず2018年のアジアパラ競技大会に出場できるよう、着実にタイムをあげていくことが目標です。



大相撲横須賀場所春巡業 「ちびっ子わんぱく相撲」に 参加しました

附属久里浜特別支援学校
教諭 工藤久美



平成29年4月12日(水)、
横須賀アリーナで行われた
「ちびっ子わんぱく相撲」に幼児

児童40名が参加しました。本校では、平成25年度からの4年間、一人の寄宿舎指導員を中心に寄宿舎の子供たちと一緒に相撲大会を行ってきました。寄宿舎の子供たちは、相撲の動きやルールを理解、しこ名に親しむことやまわしの着用、ちゃんこ鍋作りなどお相撲さんとの交流を通して学んできました。また、幼稚部でも相撲遊びやお相撲さんとの交流を行ってきました。

ある日、横須賀に春巡業が来ることが分かり、参加させてもらえることになりました。そこで、当日の参加に向けて、相撲のルールを知る、まわしを付ける、相撲の動き、そして会場への行き方や一緒に行く人を理解する学習を行いました。当日は、スクールバスに乗って、幼児児童全員で会場へ移動し、控え室でまわしに着替えたり、2階の見学席に移動したりして、それぞれの場所で楽しみました。やる気満々の表情の子供や、「見るだけでやらないよ。」と言う子供などそれぞれ思いをもって土俵に向かいました。実際の取組では、手を伸ばしてお相撲さんを押ししたり、挨拶をしたりするなど、満足した表情で土俵を降りていました。本物のお相撲さんや大きくて高い土俵、お客さんでいっぱいの会場の雰囲気を感じることのできる貴重な体験でした。事後学習では、ビデオを見て振り返ったり、お相撲さん達にお礼状を書いたりしました。子供たちが相撲に興味・関心をもって意欲的に取り組み、新しい経験や学びを深めることができました。



ハワイ児童交流会を終えて

附属小学校 教諭 鷺見辰美



8月20日～8月28日の日程で、附属小学校児童24名がハワイ大学STEMS²プログラムと現地小学校との交流会に参加しました。STEMS²プログラムでは、ハワイ大学構内で現地の小学生と一緒にロボットを組み立てたり、タロイモ畑体験を行ったりしました。英語に戸惑いながらも活動を伴う体験のため、楽しみながら毎日を過ごすことができました。

ハワイ大学附属小学校とSt.ルイススクール校との交流会では、本校の児童が主導する折紙体験や剣玉体験の場を設定しました。日本で覚えてきた英語の説明から始めますが、途中からは動作を交えながらの簡単な英語でのやり取りをする姿がみられました。

児童がこの期間で英語の力を向上させられるわけではありません。それでも、日本とは違う文化に触れ、言葉がわからなくて困る体験と同時に、少し意思疎通ができるうれしさを味わうことができる体験は貴重なものになりました。

STEM²プログラムの最後は、本校の児童と現地の小学

生で協力して、これまでの成果を英語で発表する場が設定されていました。英語が母国語である現地の児童と同じように、表現豊かに発表する本校の児童にたくましさを感じ、帰国の途につきました。



第1回 インドネシア日本高校生SDGsミーティング @ジャカルタを開催

附属坂戸高等学校 農業科 建元喜寿



今年で4回目を迎えた、インドネシアにおける「SGH国際フィールドワーク」。グローバル人材として重要な「協働力」を育成することを主眼に、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校、ボゴール農科大学附属コルニタ高校と合同チームを作り、熱帯林の保全されている国立公園およびその周辺の農村部において「森を百年守るには自分たちに何ができるか」をテーマに3週間の活動を行っています。

今年、新たなチャレンジとして「第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング@ジャカルタ」を、ジャカルタにあるインドネシア環境林業省のホールをお借りして、開催しました。日本からは本校を合わせSGH校が3校、インドネシアからは5校が集まり、SDGs(国連持続可能な開発目標)の17の目標に関連するそれぞれの学校の研究や活動の成果発表を行いました。本校の生徒は、林業高校、コルニタ高校と一緒に、フィールドワークの成果を発表しました。

SGHは2018年度まで。指定期間である5年を終えた後を見据えた活動を、残された1年半で模索していきたいと思っています。

なお、当日の様子は、インドネシア現地邦人むけ新聞「じゃかるた新聞」に掲載されました(<http://www.jakartashimbun.com/free/detail/36711.html>)。こちらも、あわせてごらんください。





富浦生活

附属中学校 教諭 多田義男

本校に入学した中学1年生は、7月に千葉県南端の富浦町で、前期・後期の2組に分かれ、4泊5日間の海浜での富浦生活を行います。

この富浦生活の始まりは、嘉納治五郎先生の愛弟子である、本田存先生の元、明治30年(1897)嘉納塾造士会の塾生たちによって神奈川県三浦で水泳指導を開始したところまで遡ります。明治37年(1904年)の今から100年以上前に現在行事を行っている富浦の地に、本校の水泳場が開設されました。

現在のように一年生全員が富浦の水泳に参加するようになったのは、大正8年(1919)のことです。以来、本田存師範の水府流太田派の古式泳法は、桐游倶楽部(本校卒業生が集まる組織)の献身的な指導の下、附属中学校の伝統的な泳法として現在まで毎年継承されています。



期間中は、水泳を中心とした昼間の活動と、学習活動やレク活動を中心とした夕方からの寮での活動を行います。夜の会では桐游倶楽部からの講話もあります。また、「水上小会」といって、先輩方による水府流太田派の泳ぎなどの模範演技を見る会もあります。

そして、4日目の午前中には1時間程度の「遠泳」があります。遠泳を行った午後には、検定があり、個人の泳力の測定を行います。

100年以上前に始まった富浦生活は、現在も先輩たちの温かい指導の下、学年の絆を深めたり、本校の歴史に思いを馳せたりしながら、日本の伝統文化の一端を知り、世界に通用する大器になることを期待しながら続けられています。

プリンスエドワード島大学 (UPEI) 研修

附属高等学校 教諭 矢田理世 / 曾根典夫

8月12日(土)から27日(土)まで、SGHプログラムの一つとしてカナダ北東部のプリンスエドワード島大学(UPEI)で研修が行われ、本校1年生16名が参加しました。引率は前半が矢田教諭、後半は曾根教諭が担当しました。4月下旬に申込みを開始し、6月に選考試験を行いました。同時に、申込者全員を対象に事前研修を5月から3か月間、放課後に本校で実施しました。

滞在中は近隣の家庭でホームステイをしながら、午前には大学で授業を受け、主にカナダの文化、歴史、多様性、そして島の地理や環境問題などを学びました。午後は農

作業体験、シリアからの難民学生とのディスカッション、「赤毛のアン」のミュージカル鑑賞、「赤毛のアン」の家を再現したグリーンゲイブルズの見学など、様々な活動を行



いました。各自が記した日記には、食べたものをイラスト付きでまとめていたり、その日学んだことを英語でまとめていました。ホームステイ先では、その日の出来事について話し合ったり、最終日に発表する個人研究の内容について相談したり、スピーチを聞いてもらったりして過ごしたようです。自分の考えをはっきりと伝えることの難しさと大切さを学んだ滞在でもありました。

授業最終日の個人研究発表は、事前に国内で準備してきたものに研修中に学んだことを加え、各自が行いました。発表後の質疑応答では、予想外の質問が出て自分言葉で考えを伝え、2週間の滞在の成果を見せました。発表は研修報告会、文化祭でも同様に開催され、回数を重ねるごとに発表の態度や内容等を向上させていました。

平成29年度 筑波大学附属学校教育局主催 「教員研修会」

平成29年度筑波大学附属学校教育局主催「教員研修会」を、次の要領で開催いたします。

1.日 時:平成30年2月24日(土) 10:00~12:10^{予定}

2.場 所:筑波大学東京キャンパス文京校舎 134講義室
(東京都文京区大塚3-29-1)

3.プログラム

司会・開会の辞……………附属学校教育局 教授 江口勇治

教育長挨拶……………附属学校教育局 教育長 宮本信也

講 演……………「神護寺の伝源頼朝像と善光寺の源頼朝像
—絵画史料との対話が創る深い学びとは—」

東京大学 名誉教授
(元)群馬県立 歴史博物館長 黒田日出男

講演後質疑応答

閉会の辞……………附属学校教育局 次長 松本末男

4.参加費 無料

5.申込締切 平成30年1月31日(水)

6.対 象 筑波大学教職員及び学外教育関係者

申し込み・お問い合わせ先

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
筑波大学東京キャンパス事務部 学校支援課 教職員・学事担当
TEL:03-3942-6809 FAX:03-3942-6911

平成29年度 筑波大学附属学校研究発表会

附属学校教育局では、平成29年度研究発表会を次の要領で開催いたします。本学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、皆様方にご理解をいただくとともに、今後の教育研究活動の一助としていただければと考えております。

日 時:平成30年2月24日(土) 13:10~17:10^{予定}

場 所:筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区大塚3-29-1)

詳細については、今後、附属学校教育局ホームページ
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>にアップします。
ご確認ください。

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.40

発行日……………平成29(2017)年10月31日

発行者……………附属学校教育局教育長 宮本信也

発行所……………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……………スピーチ・バルーン

印刷……………広研印刷 使用紙:U-Jimax [日本製紙]

